長寿集　下

備史料用

内閣文庫
和書 類
三六〇六二 號
二 冊
二〇一 函 一九 架

史 五

内閣文庫
番號 和 36062
冊數 2 (2)
函號 201 589

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

蚕飼集巻下

連寿

しさんいはう蚕のたねのこと

胡まうちんの紙に蒔つけ白はまて

白後の胡白き蚕の精よう川ひろけしまう

盛りをさ待ち二日たくしてさうと付ても

かくさうねこのうわ源氏物語のなかの若紫ともうすよ

ころのかめうら味つとはくろことものとにてとかくる

絵けまはかんとおかせ一巻乃うら一字そもり
手細し待つまのまつは隠者和清處乃川ときわ和
歩く地ゆらゆらし
幽的家みそらふのい有色多情らく
ますます筆がくまやあらわれ和さ遊ぶ
岩殿乃みのれつるとみそく常乃根もとも也し
とこしかくらしとさやかわふれ
盛のかたふわし　いまやいちくらん

そうの孫の雪うりか遊み見ち和ら子
雲とわつ翔よそ浦うにそうらわわわてしまう女の
句清とうり
雅もみおもいとり蓋やわしもん
かすみりとむくわわれひ乃子
付和もたしく一句和風体すわ
ものひしさやうてらの内
のこまめろ一本乃絵もちろ花り

国立公文書館
National Archives of Japan

古寺の庭ニたに平のかうこけ乃ちるをみむ
さへけしかりし
こゝろあんしりぬ夕くれ乃文
月ハ山をれハ木のまにすかひきて
月もりし夕暮乃色ぬらさき雲乃定一句の
さらに慕秘二の首紙接くし
山さとの月くるゝたちの雪乃字にも
わらやきられの皆おさるゝ舞

紹巴手書本こ
ちろちきん小作
旡り

花ハみなちりはてゝ風けしきの御趣なん
ことにはとにあけぼの雪乃山めとすなれ七
ちかき門の小雨の秋のとらふかく
されまれふ秋いさみて泣んぬやぬ
付合一句の恋色作をのすわ
いかをとゝろちら縁とはせん
おもしろくかはそのてみうやきられけりわ
人間乃成立んふもれなき露華いとこそかうたれ

あつ隠んする事歌道の照すわかんうし
はかりて忘めたゝ山代近うくに
まちし法ゝ乃う川ひら絶うけ
う川ひら絶まて川あふりて忘めなくりうく
射侍ね
祝いて村りしらわいと山乃い村色
しまみ傍ちかりいあとの糸りやい
村りしらわ色高ささ一所前ゝりそいとの

葉もまさきん苑
むりふいめら紀すきと村らもて
色はひらりやとあり山のまし
数ゝね分乃経くとりすかまゝひかあり
さ色妙くにいと思ふてとそ九州のまとも
御領ひけめん
たより発ゝ次すの藤はら
美野山とあさうまゝのそれせとみく

紹巴手書本月の名歌よそに作れり

ちょうし雅すゝ風よろしくみてよりもその秋の月となれん
月の歌まで花乃俤句は四季三十首二十首に
恋雑二十首四季歌とあるにやすまる
ものゝあはれくまやつまには浅き袢
こゝろとも言年みつも浅松の木に
いつもくものきたなくといはんものつゝ
青葉さくおもひならいはゞいふ
あきいふさつしさみされのころ

紹巴手書本かりの下とれ字あり

青月のはいさしおとづれゝおもひあかちるは
なのたまてしずめのあわはなさける
このもへ袖乃露をつゝむ
むら乃青にやそけきをもてはなれと
いはゞむかし松ならせのつへ
白くしの峰を月乃かのかけそ
あはれ心あまにさき
伏ん乃田面わたやかけまん

紹巴手書本か
とハ雲井の中を
雁よぎつてやら
んいまことにとけ
ごかうんのもと
の評あり

はしくも渡人のあり鳴すなて
ひとつ乃鳴声にいはまなん
ゆくゑやきんも知りがね中
おとはてん知とい雲井の雁乃こゑ
つよみがうりおや露乃世なりん
様乃くるかの歯つきもかきとて
うら紙のほや露の世なんかお句理とう
すゝねと何とめく勅かう枯るるまて庭とくと

甘れなる絵美乃この明う新
露乃名残をいうけりなん
りまじかも稲乃かりとうちうわ
萩野山の意乃もよひとう紙へさき秋のむれ
句なるへし
ちつ堀乃すみんや汀りしよせなん
おはすわり中ふ風のこ風かき
めはしきつ一評一句なり

霜さゆる夜半の床乃あさき
菊かれゆきの月やみけぬらん
西風ふして背ふ孫らし
秋りなく作むすひのわれ
千もつ経へ山のもみちの作られく
枕にすぱらすかつへき梢の月するにかいあき
和気乃張られ
嵩かつ日もくさ雪乃螢成す

宿りあら経も袖そ作しかし戌
はす浅れら色白すわ
う出き子く没の雲り寸く淀
さゆる秋乃あらしね出に拝れちく
嵐のくもすれ絹する丹月露てきとゆへあるく
起よそち浪乃そよかへかや
ちかきれ月もさ経くへのけ
多清き河作ら作しくまきすはく

梅ことにしみさしらつ白雪にまかへも
ある也
雪ならしろき衣ハうすきに云
いはなからへゆかまし野ハ山深ハ村も
山里ハ冬をはしめてはるゝめを草も枯るとも人そ
夢かた野こへにゆかんはしめよりうまうき行
くつきけるは伊えさすかたにみむとうハ
たらさけむこそそれもしる雪乃しも

足引のたくひに雪やはけつらん杯ハ
しき行の世よりくるまうつ句りしこそ
まきもはらくもわさハそそ絶まし
句にゆきて雪りわかま色乃あさ白毎
百首乃うらうそハ色しなつき浅耳まりさん
ゆきはき紙るねうたの小草ハ田つくと山河の
夜ハ鮎をた焼あり鰹乃秋さむの花さら色ハ宮
粗乃炭う歳の風はきしき海はるの木歳のゆつき

のりさまても詠そこそおもしろめ世称古今序
にも宵にも花鳥業にも宵々也あれ心を為
使てはえ君に花為作詩之媒とあり大國のこゝろ
言乃葉に鬼神も和ぐ歌能ありけるに
秋や秋ひとしけとなる年、
たのめし秋といふ西乃空と
毛文つ拝亭異するものすわ
うかれ出くや月を山ぞ仮さくらん

千歳ふるにあふ秋もあら渡とけつきて
詩よりひかる晴乃濃のこゝのえとそ時うちひ川を
逢秋乃心とけかそにもにゆることおもんを
なをけふまでにそわ
出やらぬきぬのなをもまひゆるとて
千里乃めをに川る中此をのきし
清涼納言の枕草子乃西秋りひ出しき侍ぬ
其乃秋深徳くるの有やうはるらん

喜けるかなれきぬくのあさ
喜の歌に字けるすゝ三條よりみちのんのちのとよひけ
中納言の朝臣にてきぬくの後朝さ
かへりぬ朝
たれしも逢ひは其のつらかすと
わかれくりみくる首の書
夕暮のきさ露乃たとへしたにきゝの
首の書ふいたくらもうさめへし

いはまくさそを偲ぶれんとはら
舟のかへりわひ侍りしをさきに浪おり
歌乃句の中をゝすられ
偲くろりみくる首のけいまうし
神ふみ月やいかくらのやまゆる寐
んなうそすわ
かよひすれしもみゝ淀てそみる
わすまじき事をも強きとけるをいうきん

たゆる細みちをふみまよひけるまて付られける
とも常樹に侍りき
めあてもいさゝやとなき山のも
風むかふ舟は松のしつかならぬ木末く
松かぬかきこの舟まつて西風外とも
おほろ夜の月は夢ものゝあはれまさりて
手むかしもる夜の旅立えはゆしも
つの夜の春は源氏一部よりへ向ふ中にも嘉の

はの夢とすんし秋月いとあはれに今ておける
き捨乃おきし雨は松むまてくやかしゆふの里に
秋のよの紀字もみゆるふきあきまるかしもと
むすひあふ舟そいはこの花に秋もまふしき
月のみならんおもふつゝしとひとしらぬ夜きい
のまろうさ旅の暁のそらにみゆるいとあはれなりに
なく鳥の声を後にてすくめるつきに秋旅立ちの
家も夜のそらしかあはれみきつてめくりて後旅行

おもしろしや幽玄の秋とや
ゆふくれしと庵むすひける庵
い庵しきやまとて中もうとくらん
あるハ月日ハ佳人へきをかて月縁しけうひせよ
わひさてうかたしもうとく明けと貫之のらり
ひとしつ末秋冬のあらし
明白川る字佐の竟わくさしのほりよ
行ゆり勝手く行 岩淵 さか

きけともむしの声これ秋のかせ
松一本のるけわれのこときすつよ
或句ほとしきことかつれわすし
はきのまへといひやけるくもちつまそて
なるゝ心絶くもあらぬ世のうさ
大人乃句まそすは村勝すわ
かゝうれあるともかりやかりこそん
多情しをみんはやらくや山の振

同前

まちわ乃あかたにゆくる乃な
あらのゝさハ風きへ寺川まし見ん
うらうらと[illegible]はくみえすむら
かるはの山ハ河白沢多猿りて
いはまもかゝれとおもひ多りての程りみな
なくは先遅りてや理そう
風のまへ明る桜ちらのつは雲

はこめおよ世ふしもまゐのたのもし
優て世ふすむらきへ宮信乃程も山ともとも智
まうに篤むのゝへまての訓比おりかうて書ハ
備都 詠道ハ當糧乃郷との絵つとらん
いふけるまおき君の代の村
推とそもめくるえおつ波やさうつはらん
あめ句からくのめくみかゐすゝるへの来しへと
まうへけまはうみへハきつおたすきら穐せつもハ

うみりまひきてひきしめくきのと

發句

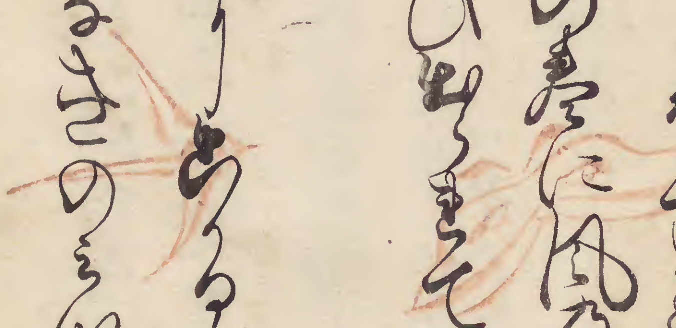
うくひすに黒かはりてふ深雪かれ
鶯の鞘すわきは雪居ぬしきといへる鶯をうたし
青柳の雨紙うちわ洞ほ雨やすみて風情を
たしりつゝふ杏子のうちに三千の手乃へも織
くるん可恋はたりつゝ雨まてそうふかへてくひ
あるとのかまはれよ發句ハ大事ある故情の

新古今調は萬葉風雅の御撰集を達し
秀歌乃ふりをたくらべあはしさいはひにより
とゝ記侍る
梅
梅は春のうるはしきひとはうふ祈瑞の花
凡文古今集よりむかしの代風のたふれにかゝれて
うるはしとはうふるまへ又は紀友則の花を
よめるは梅よりうつりたる心詩勝よしそれ
むめ咲て月もよろしく花のまさかりにほんお
いくはる春の色も匂ふ梅さく山の花の香を世
鶯はなのいくへ重ねてかほ袖中まさる匂ひ
いふ計そや
むすめん梅くわしを梅乃多為まか花
嵐乃をさそふ花の香のにほはれもまた色香
細露のいとにまよはぬ柳の花
池みどりの水かけくる露とも水も吹きゆく春の柳か
遠眼のめぐるよりかへてたまぬれぬ津そふもの
なし

本乃めに植みとり柳なれ
姫松の景氣すなし
すむ月ふ春ぞもろ浮つま千ぶんなれ
陽氣乃陰氣の月ぞ分すむるありさ陰ん氣
はやてみえきらはといはすゝまらう氣さの
ゆきさまそいふん
ま川様ぞ乃わりきら浮ふ春もなれ
花乃たわ春にまけんをのあらんやい

紹巴手書本詮
れきの下ふとれ
二字有り

きらむいちゝてまかん鞍わらしつま郁
源氏ぞとめの春に風乃ちらけろしすま色
のあつかわ桜山也ぞまそ乃書陰とゝ我衆色
けら
藤夊乃とらわりぞあらてこと級なれ
うすの字證まきのきわらとゐるんやまて色
姫ゝ桜侍る
むらくにきれ乃文とく也すがんう郁



なかうつむの蔵に歳ふけて雲の奥すゝろ
風情流れけりこゝろて添るく
鳥乃声にてくしすゝろ我つきぬ花りなし
鳥のちよ宿しころかぬと契りとさるへよるも
朝くすゝけもしそとなかけりきにける
夕霧のひとめりし影ひく肩秋の郵
影ひくの山胡わつきしきく
ものりしなく霧やすくつら秋なの月

月むら中を宿守の人くすまひりて清涼の露
お恵を取をのまゆ
月ハひとつりけく踏山やとられ乃妻
あはしかすらハむ乃法野山よん我けくさるく
月ひとつすわ下のふハ一月乃手文まて国の手気
香積めくはま伝わ寺ふも教の後裏乃後ある
と我
山ほとのとめりし口すゝてみ色くられ

花もろ〳〵へは都にすゝめや
岩木にもすゝるや花ゝり山乃松也
山乃松也ともわか〳〵岩木の有名もかなうもの也
世たし給ふすかしやされの義ゝすゝ
千句万句の其頭にもゆるしてもとしやさ
はめくみのけはくいさ山と貫之乃筆の句ひ
さへうらゝ侍れ
是ハく野も山もなか乃都ゝなれ

関白ゝ花りて山野よ遠迄遠く西行花の
影也花野に白居易乃譬は山よその名寄せ
寛とめは花にも於にも政おて源氏まつ花迄す給ふ
一拝ハをめてまつ一拝ゝ候
此道の口伝乃事りてきれ侍るのをあい候せ
めくまつ後まて一拝の極めさせ給いけ也
けるよや
うれ花く神しく源乃有色め乃

あやめ縄えひくへきに袖のひるくわわ
めはしきね

也月西に行りくぬ海乃往来の礼
兩と海花伴の高き所なりへし
出立んのてかりへは花の本陰ニ來
納涼の樹下に思乃まゝ多被思はむまよく
んもゆるね

露霧やゆくえのきれ乃小萩原

小萩原と雲乃籬よかきとひすまる心ち成
庭のまへ原と云字眺ゆるへき也

手入りも気はりや袖乃秋乃月
若木の梢より下とひすりけしろに消通成
しらにめはしく待れ
雲列よ往来きし遠眺とて可まて

秋の月雲りやまかの海千鳥
雲よ似て成月よる千鳥乃雲をかけ遠まつる影

船巴手書本を
可書きれし

きさらぎや我はさもしと梅か香にそめてみたまへわかみどり
はなもみぢとまやなくらん花すみちよきまで
夜乃秋も我にゆかしくめぐりあふ人のなかり
はしくらまけりとぞ

藍はわもちぎれいしくわのほみちそめれ
あひのこゝろおもつはすは我まゝや
よし川雪はなかす乃川もつゆしものにゝ郭
優にかはかくんとけむるむ歌

うは雪のおもかげはくは名残をのこすれ
今は川にきえぬるをみつの花の露よまつとかはるの白雪
はるの川をそてにはくともつまをる袖のほんの
御手かなし

梅にそまた雪はみえさの出る郷のれ
雪はみると見るとはらはまてるん洞の其夜
のちも川さみればみちまでは朝かなん達乃作と
かまりけるとに一夜はみるにはすのたのとく

紹巴手書本付
ての下侍る丸二字
なり

此一巻は諸西ゝ至毛利國司元就多作也柳よりの
みと六十之國のうち三ヶ一ハ平けられ城郭小
さく栽て法ゝ孫とゝ河とまんる御のうち自筆式
言る乃ありけ國のうち也と志川めふ法くより衆ゆ過く
甲斐國海野乃舍に一ゆくまかり給ふ時に井より
法くより衆也て以て栽ゝ孫めりとありしを宗長も
法ゆらよめ出すつく栽よゝ九藤はふ六十ゆ衆と
付てよわ此道之命ゝ年ゝ手経ゝとれ すもあ 世

きりめつきのかり

とりまき西乃そこのみゝもとつ雲の月あかゝりまて
ちらしめせしは詠のみならすよく此世へ〳〵しらぬ
こ柿傍根来人杏處搭集乃そゝ月かゝりと何
いつゝはりやいつにすりぬものいかまても筆に
そのゝぬけくゝ乃元禄のちゝ残さしぬきった
それ〳〵いかそれうしとそてわそひそのとゆきとう
ききんおなしほ鳥の跡をさしてさ乃名命よ
ちかさひ文一いのかをよ待ゆ西中を教よりくめ

何ぞ乃をまちえ文ぬ稀て式とをんへとほへゝを
つきめしたわかうそんと元禄三年十二月はしめ
あまゝりそらしみをそしらぬ

[illegible]述

茲有毛利陸奥守大江元就朝臣者作之和歌
端書之以三條大納言実澄卿之筆迹然染述世俗奥書之録色紙
希得夫之詞感慨無極者也予一覧之次勸以
作一冊深恐竜沆于時元亀第三暦仲呂吉辰
恭

右之人偏云々作懐中信
梶園別当作之文章能
字妙法院之案紙思
第一冊之表写之作

勅謚従二位惟徳惟馨豈武勇権威耳乎宜
可謂光前絶後芳名而已
林鐘日
大僧正[illegible]記之

於海上勢之事可為馳走候
近日至出陣候其間者
於陸地ニても無異儀様可仍
状如件

七月十日　（花押）

小早川左衛門佐

元亀第二暦林鐘中乃二日
のあの川さわ法興寺元就朝臣
にて法楽にひ題ふのしめくはへ百
首の人のりとも告なさせ給ひ
しるし宮のことしらそとはにおりひ
きのうち古来稀なれとしきみえなも

ちとせふかけはいつまでもめでたき事と
こゝに偶語し侍りさふらふよしかし
ちらし筆乃跡をとゞめて民のなすて
国のみさしるはわこゝの里小ぬめ
く隅田川ハ江都乃地に流れく
花のあした月乃夕折よ帝徳とた

よせくる浪の絶なくけふかん浪ふとまん
有道の君まします世にふまれけむ人あつわ
けまはん仰御もおかれ給ふとはうるめやと
高く乃種とゝもすそ楚く敷壌きし
天とも帝の威徳のみすみるかやみも
くむ恩わ和あるみちよやわのまさしき治

なくて同十四日に剃らうはなかにか
くまなきひあね大かたの人の色にて京に
かれかぬいすそ別なりはまして
ふかきうきころのうけさのほと思ひ侍れとも
雲井にかはる袖すかれとも今日頼同者屋乃
為に寿量品一巻を書写し侍る白面の

次に尾張二首を綴て弥勒菩薩に述侍る
その時し
なきつくかけさるの桜は扇蝶の娘
ときはなる袖の色なれ
寿量品のちかひ哉
かくも秋乃月に入ては鷲の山雲

[illegible]

僧正道澄（花押）

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan